

フォニックスライムによる 英語発音訓練の有効性を検証する

田淵 龍二(ミント学習教室)
マイク キャネヴァリ(マイニングリッシュ)

【背景】

英語が読めるようになるという触れ込みでフォニックスが使われている。実状はどうか？ 幾人かの指導者に尋ねたところ、否定的な雰囲気が強かった。原因は音声にあるようだ。音の入っていない生徒に読ませようというところに無理があると言う。やればやるほどローマ字読みになってしまう。むしろ、早く英語が読めるようにと、積極的にヘボン式と同様な手法としてアブク読みを教える指導者もいる。もっと極端になるとカタカナで表記するようになる。

元来フォニックスは英語を母語とする児童の教育法だ。すでに身につける音声を文字にしたり(spelling)、知らない単語を読む(reading)場合の考え方として学習する。音(と意味)を身につけていることが前提となる。”u in umbrella”と教えられた時 umbrella の音(と意味)を知っているから“u”と言う音と文字を抽出して認識できる。しかし日本人学習者の場合には umbrella の音も(意味も)知らない。だから音(も意味も)入っていない日本人学習者には適合困難である。

しかも「フォニックスの規則」は適用条件が無原則で「例外」の方が多く、とても「規則」と言えるものではない。フォニックスと言う英語圏で有力な学習方法も、日本人学習者には弊害の方が多いのではないか。

【目的】

日本人学習者にも有効なフォニックスの利用方法と教材を作成する。

【仮説】

フォニックスライムを使って、音(と意味)を刷り込み、同時に文字表現に慣れさせながら、読み書きの習熟を計ると効果的である。この手法であれば、従来のフォニックスの弱点であった音の問題を解決し、発音の質的向上を計れる。

【フォニックスライムとは】

音(と意味)の不在を解決する教材が必要だと考えた。フォニックスの規則を教えるのではなく、規則を利用して教材を作った。それがフォニックスライムである。同一のライムを持つ単語群をリズムカルに唱和することで、英語学習の要(かなめ)である発音と抑揚(intonation)を身につけることが目的だ。ホール

ランゲージ (whole language) の考え方も取り入れながら、学習者の統語能力を引き出して自律的理解を促進する。日本語に拠らないダイレクトメソッドである。

フォニックスライムにおいてリズムを重視したのは、マザーグースの朗読を通して、英語の発音と抑揚がストレートに入っていた実践に基づいている。ライムによる語群 (word families) を重視したのは、日本語にはない母音の習得を第一としながら、同時に子音の母音化阻止と呼気の強化を目指したからである。平たく言えば英語口を作り英語耳を養うためである。

【実践研究の概要】

	処遇 1	処遇 2
被験者	幼稚園児と小学生	社会人 (英語学習歴 20 年以上)
期間	昨年 9 月から約半年間	今年 4 月から約 1 ヶ月半
人数	13 クラス 100 人強	1 クラス約 10 人
授業	週 1 回 5 ~ 10 分	
設備	コンピュータ、プレーヤーミント、プロジェクタ、大型スピーカ	

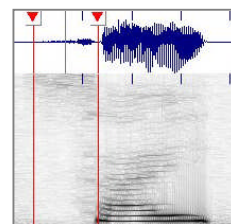
昨年秋からの児童クラス (処遇 1) では、発音の向上と文字の定着が見られたので、今年度からはドリルなどを利用した読み書きの訓練に入る。

英語習熟度の高い社会人クラス (処遇 2) では読み書きはハイレベル (大半が英語指導者) であるので、発音矯正訓練として実施している。ただ、発音もすでにハイレベルに近いので、それがさらにどう向上するのが焦点である。4 月の導入時に生徒達は「口がくたびれた」ともらしていたので、「英語口」を作ると言う口舌腹筋強化の目的は、さっそく達成される目途がついた。

【発音評価】

発音の評価は、4 月冒頭に収録した音声と、5 月後半に収録予定の音声と比較して行なう。収録は 1 音節単語と、マザーグースの 1 節。

評価方法	耳で聞き取った主観的評価 波形と声紋分析
視点 1	頭部子音 (onset) の強さ、長母音 (nucleus) の長音化や 2 母音化、末尾子音 (coda) の母音化など
視点 2	リズムとイントネーション



【結論】

被験者が児童の学習 (処遇 1) については、半年間の処遇で発音面での効果が現れている。発表ではその音声映像を紹介する。

社会人の学習 (処遇 2) については今年度 6 週分延べ 30 ~ 40 分の短期的効果について音声と波形声紋解析を紹介して検証する。